

Title	エミール・オルリックとウィーン分離派
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 98-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53233
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

エミール・オルリックとウィーン分離派

谷本尚子

導 入

E・オルリック (Emil ORLIK 1870-1932) は、画家、版画家、グラフィック・デザイナーそして日本を中心とした東洋美術の専門家として20世紀転換期のヨーロッパで広く知られた芸術家である。ウィーン分離派の機関誌『ヴェル・サクルム』では3度に渡り彼の特集が生まれ、版画作品、オリジナル版画、イラストレーション、エクス・リプリス等50点以上の作品が掲載された。これらは主に分離派の日本美術への興味と関わっている¹⁾。しかしE・オルリックは、ウィーン分離派の中では常に客観的な立場を取り続けていた。版画及びグラフィックの分野に於いてE・オルリックとウィーン分離派は最も関連が深いと考えられているのであるが、ここで興味をもたれるのが独語圏では線描画と版画の両方に用いられる「グラフィック (Graphik)」の概念である。

ウィーンにて日本の多色刷り木版木の技法を紹介したE・オルリックの功績が、版画技法の問題点に集約されるのか、さもなくば印刷芸術全般に関わる示唆を含んでいたのか、ウィーン分離派の印刷芸術との関連をふまえ考察を進めた。

E・オルリックの造形思考

E・オルリックの主要な造形は、手による二次的複製の意義を重視し、帙本として制作販売された版画作品であった。これは20世紀転換期の平面芸術全般に共通する大衆性の意義と連なり、則ち彼は意識的に手

に取って見る「応用美術品」(=版画)を制作していたと考えられる。

E・オルリックの初期の銅版画に見られる作品特徴は、伝統的なモチーフと技法実験による表現の独自性にあり、線や色面による中間調の整理と輪郭線の強調に効果を求めた実験が続けられた。これらの実験は版画の芸術的表現の模索というよりも印刷実験として評価される。技法混合による試みの延長上に用いられたのが色刷り木版であった²⁾。ハイコントラストに撮った写真を基にしたと考えられる表現は当時の木版画に多くみられた傾向であり、E・オルリックの作品はさらに色版による中間調を加えた特徴を持つ。

色刷り木版画との出会いは、日本の多色刷り木版画への興味へと変化する。技法を重視していたE・オルリックは、モチーフ上の観点を乗り越え、板目木版と水彩による日本の色刷り木版画の技法と運筆法を狩野友信から習得し、様式的形態描写の意味と構図の効果を経験的に得たのである。特に技法研究から得た色面への陰刻と輪郭線はその後の木版画に大きな影響を与えた。極端な形態の抽象化や背景の色面に施された荒々しく絡み合った線の表現等が現れ、画面全体が均質化された様相を呈していった。写真的な描写性を中心とした彼の作品が、木版画に付いてはより抽象的な表現へ至る傾向を示し始めたのである。しかしその後E・オルリックは木版画の制作を放棄し、一瞬の印象を捕らえたスケッチ描写の様な

銅版画へと転向する。木版画の制作が中心であった時期とウィーン分離派と親密であった時期がほぼ一致していたのは興味深い。E・オルリックのグラフィック・デザインとウィーン分離派

ウィーン分離派は、最初外国の版画の技法と動向に詳しい専門家としてE・オルリックを迎え、さらに日本旅行に関連する仕事を高く評価している。E・オルリックは、オリジナル版画や木版のエクソ・リプリス等で日本の意匠デザインと木版画で得られた線的な装飾様式をウィーンに紹介した。

ウィーン分離派の平面芸術に見られる日本の影響に付いては、K・モーザー(Koloman Moser 1868-1918)等を中心とする面的コンポジションを用いた強い色彩対比の装飾的效果とモチーフが上げられる。これは後に独立した装飾モチーフとして室内装飾等に展開された。これに対してE・オルリックのグラフィック・デザインは装飾単位が独立して用いられる事はなく、また線の要素無しに色面が用いられる事もなかった。

小泉八雲(1850-1904)の著作集(図版)に見られるE・オルリックの本装飾は、ウィーン工房後期のより装飾的な傾向に最も近い様相を持つ。ここに見られる装飾モチーフは、規則性を持った文様ではなく、限られた空間を構成した物でもない。また本来正方形の小さな色面で現される装飾部分にも複雑な線の表現が付加されていた。表現方法に於ける面的表現と線の表現の違いがここに認められた。

さらにE・オルリックの線の表現の特徴を平面装飾モチーフの意味表徴の点から考察した。『ヴェル・サクラム』には、K・

モーザーを始めウィーン分離派の多くのデザイナーによる象徴的な主題を持つ挿し絵が掲載されている。これらに対してE・オルリックの個々のモチーフの象徴性はそれほど強調されず、むしろ輪郭線をさらに細い線で取り囲んだ表現等により全体の中に有機的に融け込む。この様な線の装飾性の高い表現は、H・フォーグラー(Heinrich Vogeler 1872-1942)を思わせた。E・オルリックの装飾モチーフは全体として説明的ではあるが、象徴されるイメージが幾重にも重ねられる事はない。則ち線の表現を用いる事により、情景描写的に空間を構成しているのである。

E・オルリックの造形は、イメージを再現する技術へのこだわりであり、版画を基盤とする線描画(=グラフィック)であったのだ。

注)

- 1) Ch. M. Nebehay, Ver Sacrum 1898-1903, Wien, 1975.
- 2) Franz Matsche, EMIL ORLIK Zeichnungen und Druckgraphik von 1889-1932, Veranstalter vom Adalbert. Stifter Verein e. v., München. Ausstellungs-katalog, Bonn/München, 1972/73.



LAFCADIO HEARN., IZUMO, Literarische Anstalt Rütten & Loening, Frankfurt a. M., 1922.

たにもと・なおこ 京都芸術短期大学(非)
1992.10.24 理論分科会